



# 筑紫女学園大学リポジット

The Scope on System Theory on Social issues :  
Bank Transfer Scames, Compensated Dating and  
Bullying.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古賀野, 卓, KOGANO, Taku メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/406">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/406</a>

# システム論の射程にあるもの — 振り込め詐欺・援助交際・いじめ問題 —

古賀野 卓

## The Scope of System Theory on Social issues : Bank Transfer Scams, Compensated Dating and Bullying.

Taku KOGANO

### 1. 現代社会を生きるということ

#### (1) 自律的に生きること

慌ただしい日常のなかでは、自分を見失いがちになる。何をめざして、どこに向かったらいいのか。何に価値をおきながら、日々を暮らしていけばよいのか。まさに、混沌とした時代に生きていると感じる。また、こうした時代だからこそ、自分を大切にしていきたいし、自律的に、主体的に生きていきたい。

だが、自律的に生きる、主体的に生きるとはどういうことだろうか。自分自身の生き方に関わることで、何かの決定をしなければならないとき、他人から指図されることを望む人はいないだろう。自分のことは自分で決めたいし、たとえ他人にとやかく言われようと自分のなかの規範に従って、自分の行動をコントロールしたい。

しかしながら、私たちの現実の生活を振り返ってみればわかるように、自分の行動をコントロールするどころか、その規範すら不確かであいまいなものであることに気がつく。

家族の中でごく日常行われているコミュニケーションの場面に限ってもそうだ。衣食住に関わる食材・生活用品の買い物から、電化製品・自動車等の耐久消費財の購入、趣味・娯楽の類への出費、家事の分担、さらには子どもの進学や就職などの進路に関わる決定に至るまで、完全に自分一人だけの意思で決めていると自信をもって言い切れるものは少ない。

私たちは、何かを決める際に、家族との関係性、世間体やマスメディアの情報、社会的な情勢等につねに気を配っているのではないだろうか。それを基準に自分の行動を決定していることは

ないだろうか。つまり、自律性や主体性よりも、家族からの意見や周囲の期待や好みに合わせる  
こと、他人と同じであることを優先してはいないだろうか。

私たちは、みな何をするにしても他人の視線や自分がいま立っている場所という認識から逃れ  
ることはできないし、逆に言えば、それらによって初めて自分という存在を保持している。つま  
り、私たちは、自分が他者にとって何者であるかとか、いま自分がどのような組織に所属して、  
どのような役割を担わされているかによって、自分のアイデンティティを見いだして、世界にお  
ける自分という位置を見定めているといつてよいだろう。自分という存在は、そういう意味で、  
他者によって支えられているのである<sup>1)</sup>。つまり、人は独りでは生きていけないのである。

だが、独りでは生きていけないことを理解するとしても、独りにさせてくれない社会というの  
はとてもくだびれる。いまの社会は、自分の存在の根拠となる関係そのものが複雑に、そして、  
流動的になっている。私たちはそれぞれに、異なった社会的役割や人間関係のなかで、その都度、  
与えられたいろんな役割を演じさせられている。そのことが「私」が何者であるかという一貫し  
た意識を持ちにくくさせていると言えるかもしれない。場面や状況の違いがあっても変わらない、  
自分が自分であるという同一性はどこから生まれるのであろう。

こうした自分の心の在り方について考えていくと、思考がどんどん閉じていってしまいそうに  
なる。そこで、ここからは、意識を自分の外側に向けてみることにしよう。それは自分の考え方  
や行動を規定している存在に目を向けるということである。

その自分の考え方や行動を規定しているものを、ここでシステムとして措定することとしよう。  
システムとは、一般に、全体としてひとつのまとまったはたらきをしている仕組みのことである  
が、構造とか、体系という用語に言い換えてもよい。いずれも、全体を成り立たせている各要素  
が相互に関連しあいながら、ある特定の機能を果たしている状態を指している。

それでは、次に、現代社会におけるシステムという存在をより身近に捉えるために、世間を騒  
がせている事件や社会現象をいくつか取り上げてみたい。これを参考にして、システムという存  
在の意味や、システムが私たちの個人としての考え方や行動とどう関わってくるのかについて考  
察したい。

## (2) 振り込め詐欺

新聞・TV等での注意喚起を促す再三の報道にもかかわらず、振り込め詐欺は後を絶たない。  
警察庁によると、2008年の被害総額は276億円、過去5年間の累計は1300億円を超えるという。  
犯行の手口も年々巧妙化し、オレオレ詐欺、還付金詐欺、架空請求詐欺、融資保証金詐欺、定額  
給付金詐欺等、よくもまあ、とあきれるばかりである。

NHKスペシャル「職業詐欺～増殖する若者犯罪グループ」<sup>2)</sup>を見た。詐欺を「仕事」といっ  
て憚らず、奪い取った金で豪遊する若者たちの実態に迫ったドキュメンタリーである。

実行犯の多くは20代の若者で、「騙されるほうがバカ」といっては、高級マンション、高級車、  
キャバクラ通い、と享乐的な生活をしている。取材は、有名私大の学生や、医学部受験に挫折し

て上京してきた若者（すでに受刑者）の生活実態にも及ぶ。裁判で明かされた彼らの犯行動機は、ブランド品を身につけ、大金を持ち歩き、高級料亭で友人たちを接待することで、「友だちより優位に立ちたかった」という。

そうした若者たちを取りしきる詐欺の元締めは、インタビューにこたえてこう述べていた。

有名大学出て、一流企業に就職したのに、採用取り消しになった彼らは「いったいどういうことなんだ」と投げやりになっている。彼らは脆いですよ。将来、有望な幹部候補生ですね。こっちこい、こっちこいという感じです。

逮捕を避けるために、その若者たちが犯行に使用しているのは他人名義の携帯電話である。証拠品として残らないように、犯行のたびに使い捨てられ、身分が明かされないようにしている。ATMなどで実際に金を引き出す「出し子」の多くは、派遣切りにあたりして生活が困窮している失業者たちだ。200万騙し取れば、取り分は5万円だという。

カメラは、実際に被害にあったお年寄り夫婦の苦悩の表情も映し出した。息子（を名乗る男）から、会社のコンピュータ・システムを壊したので弁償しなければならない、と電話があったという。結局、貯金していた350万円を騙しとられた。夫は、会社での怪我がもとで身体に障害を負っており、病院通いの日々を送る。妻は、骨に癌ができる病気を抱えており、薬代に毎月5万円必要だ。いま、その治療を断念することも考えている。夫婦の年金は、あわせて月に10万円にも満たなかった。

### (3) 詐欺は「仕事」という言い換え

番組をみていてまず印象に残ったのは、犯罪行為の本質をコーティング（覆い隠す）するかなのような言葉の言い換えである。

詐欺は「仕事」で、取り分は「給与」、被害者は「顧客」とよばれ、犯行グループは「従業員」とよばれている。このような言い換えを行うことで、詐欺行為を業務のようにマインドコントロールし、罪の意識を覚醒させないようにしているかのようである。

業務といえば、このグループの「仕事」は、「元締め」「支店長」「従業員」「出し子」と、明確に役割が規定され、階層化している。仕事内容は、完全にルーティン化され、一日のノルマもあり、マニュアルまで作られている。まさに、「詐欺」株式会社である。

考えてみると、振り込め詐欺は現代の資本主義の生産様式にどっぷりとつかった営利企業と似たような構造をもっている。つまり、被害者も含め、振り込め詐欺に関係している全ての人々を結びつけているのは、お金である。被害者が「問題解決」のために差し出す（騙し取られる）お金。ホームレスの人や高校生などが携帯電話や銀行口座の名義人となる報酬として手にするお金。出し子たちの「リスクのある労働」の対価としてのお金。幹部候補生の若者たちが自分たちの優位性を示すために、高級マンションに住み、高級外車を乗り回すために必要なもの、お金である。

お年寄りから差し出された大金の累積（資金）が様々な利害関係の一致で作られた詐欺システムのなかで循環しながら、システムそのものが拡大再生産しているイメージである。この詐欺システムは、その拡大していく組織化過程のなかで役割を分化させながら、さらに多くの被害者・下支え人・犯行グループを吸い寄せている。

#### (4) 「騙されるほうが悪い」という言い分け

このシステムを支えるもう一つのキーワードは、「言い分け」である。どういうことだろうか。ここでいう「言い分け」とは、自分を正当化するために事情を説明することであり、自分の行為を他の行為と区別する目的をもっている<sup>3)</sup>。

若者たちは「自分の懐に入ったら、自分の金」とか「騙されるほうが悪い」と平気でうそぶく。彼らの「言い分（ぶん）」すなわち「言い分け」としては、「(騙される老人に対して) 確かめようとすればいくらでもできるはずなのに、それをしなかったおまえの方が悪い」という思いが見え隠れする。これは自分から石を投げつけて相手に怪我をさせながら、避けきれなかった相手が悪いと言っているようなものである。

出し子の言い分けはどうだろうか。番組では、派遣切りによって生活が立ちいなくなっている若者が「出し子」への誘いに逡巡する場面を取材していた。彼は以前、出し子をしてしたが、犯罪行為であるという自覚もあり「良心のいたみ」もあっていまは止めている。でも、家もなく、食べるものも満足にない暮らしのなかで、少なくとも自分よりも余裕のある年金暮らしのお年寄りから、少しぐらいの金を恵んでもらっていいではないかという思いも見え隠れする。「良心のいたみを感じている」というのも、言い分けの部類に入るのではないだろうか。痛いのはわかっているから許せよ、といいながら、石を相手にぶつけるようなものである。

携帯電話の名義人となることをアルバイトとして受け止める女子高生、最底辺の労働者が最後の砦として差し出す免許証や保険証。これらの事例は、自分の行為が最終的にどのようなことに使用されるのかすら無自覚なのかもしれない。つまり、ここには「使用される目的を知らない（もしくは関心がない）ので問題がない」ことが言い分けとしてあるのかもしれない。小遣いをあげるから石を拾ってこいと言われて、何のために使われるかわからない石をひたすら拾い集めているようなものである。

#### (5) 援助交際とブルセラ問題

詐欺ではないが、似たような構造をもった社会現象として、1990年代の前半にメディアにも頻繁に取り上げられた援助交際がある。援助交際とは、売春行為の一形態であるが、広い意味では、性行為を伴わないデートなどの交際の報酬として金銭を受け取る行為を含むとされる。まずこの「援助交際」という言葉の言い換えが売春行為の犯罪性を隠蔽する作用が働いていることはあえて指摘するまでもないだろう。

援助交際を行う女子高生の「言い分け」としては、「セックスをしない限り売春行為にはなら

ない、つまり、自分は問題はない」ということではないだろうか。当時、女子高生の間に広がっていた援助交際や制服・下着などを売る現象を社会的に分析していた宮台真司は、これに関して、「自分にエクスキューズする女子高生」が「自分で勝手に境界線を引いて安心しているだけのこと」<sup>4)</sup>と述べている。

この主張を裏付けるものとして、宮台が行った全国の進学希望の女子高生785名への無作為サンプリング調査「品物別、売る？売らない？」<sup>5)</sup>の結果を紹介しよう。これによると、「パンツやブラジャーを売ってもいい」と答えた子は全体の3割、「普段着や靴下やパジャマなら売ってもいい」は5割以上の子が、さらに、「学校の制服なら」は、6割以上の子が「売ってもいい」と答えた、という。つまり、品物の種類によってなだらかなグラデーションを描いているというのである。さらに、「下着は恥ずかしいけど、パジャマなら」「パジャマは恥ずかしいけど、制服だったら」と思っている、いわゆる個人にとっての「程度問題」になっている、というのである<sup>6)</sup>。

援助交際についても同様である。女子高生デートクラブへの取材での宮台の感覚によれば、実際に売春しているのは「10人に1人いるかどうかという感じ」だそうだ。そこで、宮台が彼女たちに「なんで売春しないの？」とたずねると、「彼氏を裏切りたくない」「彼氏に悪すぎる」などといかにも道徳的にも聞こえる答えが返ってきたそうだ。しかし、よくよく聞いてみると、「カッコいいお客だったら自然な流れでそうなることもある」と答える子もいて、要は「売春するつもりでやっているわけではない」、つまり「自分はちゃんとしてる」というエクスキューズが見取れるというのである<sup>7)</sup>。

宮台は、彼女たちの状況について、社会システム論の立場から次のように述べる<sup>8)</sup>。

何もかもが「程度問題」になっているなかで、自分勝手につくりあげた仕切りのこちら側に自分がいるという事実をもって「自分はメチャクチャではない」という自己イメージを保とうとしている。それが彼女たちなのだ（傍点は宮台）。

## (6) 現代社会にある子どもたちのモデル

振り込み詐欺にしても、援助交際にしても、感覚としての「程度」を共有する人間同士がつながりあって、ネットワークを形成し、それが自己産出していくシステムの基本的な枠組みとなっている様子がわかってくる。

しかしながら、ここですぐ気がつくように、つながりといっても、それぞれが心を開き、信頼のおける人間同士としてつながっているのではない。日常的な営みや人間存在のなかでの機能的な部分のみを抽出した関係でつながっているだけである。それは、一面ではお互いがお互いを必要とする関係でありながら、互いに分断されている関係である。互いに舐め合っている関係なのである。



こうした事例をみていくと、これらの現象にとどまらず、私たちの日々の生活のなかに、「程度」を共有するつながりによって、どれだけシステムが無数に存在し、さらに錯綜しあっているか想像できると思う。このとき、ある犯罪行為に対し、個人としての倫理観の欠如や罪の意識の無さを嘆いても、それが当事者の心にはほとんど響かないものであることも理解できよう。

このことは、「みんながするから」「からかうと面白かったら」「軽いノリのつもりだった」という言い分けを共有するシステムが、いじめ集団を形成して被害生徒に計り知れない傷を与えることともつながっている。

それゆえ、個別事例における、個人としてのふがいなさやいたらなさを嘆くことにどれだけの意味があるだろうかという疑問が生まれる。それよりも、子どもたちのモデルが、私たちが生きている社会のなかに仕組みとして内在している今、この仕組み システム をこそ、もっと掘り下げてみようではないか。

## 2. システムとは何か

### (1) システムの定義

システムという言葉を、『広辞苑』で引いてみると、次のようなことが書いてある。

複数の要素が有機的に関係しあい、全体としてまとまった機能を発揮している要素の集合体。組織。系統。仕組み。

システムとは、要するに、有機体のように、多くの部分が集まってひとつの全体を作り、それらの各部分の間が緊密につながりがあって、部分と全体が調和的な関係を保っている状態のようなものと考えてもらったらいいだろう。イメージをさらに膨らませてもらうなら、日常的に使う用語として、システムコンポ（和製英語）がすぐ思い浮かぶ。チューナー・CDプレーヤー・カセット・デッキ・アンプ・スピーカーなどを一つのコンセプトとかデザインで組み合わせられたオーディオ再生システムのことである。

たとえば、「重低音がよく聞こえるコンポにするにはどうしたらいいか」と問われれば、オーディオに精通している人であれば、すぐに複数のメーカーのアンプやスピーカーの品番を答え、彼にとっても理想的なシステムを構成することができるだろう。

これも和製英語だがシステムキッチンという言葉もよく聞くと思う。ある規格やコンセプトに則って調理台・流し台・ガス台・収納部などを自由に組み合わせることで一体化したものに作り上げる台所のことである。コンポにしても、キッチンにしても、使用者の目的に合うように、複数の部分を組み合わせることで、ひとつの理想的な全体を作り上げることとイメージしてもらったらいいだろう。

## (2) システムは個人の集合体ではない

辞書的な意味でのシステムの基本的な定義はいま見てきたとおりであるが、これまでの振り込め詐欺や援助交際という話の流れからもわかるように、ここでいうシステムは、そのような物質的で、目に見えるものではない。また、システム・キッチンにしても、システム・コンボにしても、一人の使用者の思い通りに、組み合わせることができるが、現実の生活にあるシステムは、そう簡単ではない。

家庭、学校、会社など、私たちのかかわっている集団や社会文化現象など、すべてこの形式にあてはめることができるという意味で、わたしたちの社会はあらゆるシステムに取り囲まれていることがわかる。

ここで重要なのは、こうした社会というシステムの要素は、個人ではないということである。それは、いったんシステムが起動すれば、個人が入れ替わっても、システムとしての同一性を保ち続けることができることからわかる。振り込め詐欺集団にとって、「被害者」がどこの誰であるか、「出し子」がどういう素性のものか、「携帯電話」「銀行口座」の名義人が誰であるかは、問題ではない。とにかく、システムの側からすれば、その役割を提供してくれさえすれば誰でもいいのである。同様に、制服もブルマーも下着も、どこの誰のものであるという個別具体性は問われない。「現役女子高生の身につけていたものである」というイメージや思いこみが商品価値を支えているのである。

## (3) 認識上の産物としてのシステム

ということは、社会というシステムの側にとってみれば、個人という存在は、システムにとって必要な要素をその時々都合にあわせて部分的に抜き取っていく環境のひとつであるという見方ができる。システムは、個人という環境から、ある特定の行為を引き出しているのである。

女子高生は自分の制服を提供することでなにがしかの報酬を得る。彼女にとって、大事なのは、制服を提供することでなく、それによって得る報酬である。そういうものにお金を出す人間がいて、そういう売買を仲介する店があり、気のおけない友達が抵抗なく制服を売っている、期待の連鎖システムのなかで、女子高生は制服を差し出す。このとき、「下着を売っているわけでないから自分は大丈夫」という言い分けが必要なのは、社会システムとは独立した自分の存在を担保するためである。

であるがゆえに、自分の提供するある特定の行為がある社会システムの機能において、どの部分のどのように下支えしているのかは関心がない。というより、システムにコミットしないことで自分というアイデンティティを維持できるからである。

ということは、システムというのは、個人の視点に立ってみれば、都合良く変貌を遂げる認識上の産物のようなものと言える。認識上の産物というのは、そのシステムが現実はどう機能しているかは別にして、そのシステムとの関わりをもっている認識者の都合で、システムのかたちがいかようにも変容するということである。極端な言い方をすれば、その人が「ある」と言えば、



そのシステムは「ある」し、「ない」と言えば「ない」のである。

現実としての、維持・拡大していくシステムの有り様と、そのシステムに關与する個人の意識には明らかなズレがあるのである。逆の言い方をすれば、この言い分けに象徴される、システムへの部分的關与、機能的關わりについての、個人の認識上の任意性（無責任さ）が、システムの秩序形成への個人の無力さを物語っている。これは、システム論のもっとも重要なポイントであると言ってもいいだろう。

### 3. システムを成り立たせるもの

#### (1) システムの3つの条件

システムとは認識上の形式である、つまり、主観的な産物であると理解してもらった上で、次に検討したいことは、システムそのものを成り立たせている仕組みである。人のシステムとの關わり方や、その關わり方の認識自体が任意性が強いものがわかったが、実際、振り込め詐欺も援助交際も、いじめも、現実に、存在し、根絶どころか、拡大していくばかりだ。ここでは、システムがその参加者の主観的な思いとは別の次元で、システムが機能を維持したり、拡大したりしていく原理のようなものをみつめる必要があると思う。

すこし抽象的になるが、システムを成り立たせている条件は、以下のような3つに整理することができると思う。

- 1) システムとはプロセスである
- 2) システムとは、特定の利害關係によって結びつく行為のパターンである
- 3) システムは、他と區別される境界をもっている

それでは、この3つの条件について、それぞれ説明し、そのあとで、こうしたシステムを対象として設定していく視点の任意性について述べてみることにしよう。

#### (2) プロセスとしてのシステム<sup>9)</sup>

繰り返しになるが、システムとはシステム・キッチンやシステム・コンボのように、使用者の目的に応じて作られた固定的な構造体ではない。また、会社の社長や一國の権力者の命令によって決められた通りにしっかりと動く、組織体でもない。なるほど、それらもシステムには違いない。だが、ここでは、それらはシステムのほんの一部にしかすぎない。というより、システムに関して、そのような考え方はやめたほうがよい。

権力の中核にいる人間の一元的な命令だけによって、従順に動いていくシステムなど、現代社会には存在しない。もしも、そのようなシステムが存在するというのなら、そのシステムを日常的に支える参加者の個々人のプロセスがそのようにさせていると考える必要がある。つまり、参加者たちが持続的にそのようなシステムを支えているという意味で、みんなで作っているシステムなのである。

いずれにしても、そのようなプロセスに注目することの利点は、何かの問題が、ある組織や社

会なりに起きているときに、一面的に、また一方的に、何がどう問題なのかをと断定することなどできないということである。ある問題には、必ずそれを生み出した構造的な背景というものがある。その構造は、一夜にして出来上がったわけではなく、プロセスを通じて出来上がってきたものである。

プロセスとは、言い換えれば、流れのようなものであり、その流れはどこかに始まりがあるし、人の意思で変えられる流れもあれば、大きくなりすぎて変えられない流れもある。流れに身を任せていると、それが流れであることに気づかないこともある。それは移ろいゆく時とともに、様々に局面を変化させながら、人を翻弄するものでもある。

### (3) 特定の利害関係で結びつく行為パターンとしてのシステム<sup>10)</sup>

システムを構成するものは、相互に関与する諸個人間の利害であり相互的な行為である。この行為は、必ず相手を必要とする。自分の振るまいが相手にとってどのように受け取られるかについての、予期とか予測があって、未来を先取りする形で発生する。「銀行口座を開設するだけで5万円もらえる。何に使われるのか、わからないけど、とりあえずおいしいアルバイトなので、やってみるか」という予期のものにと、銀行に出かけるのである。そうして、自分の手は離れているが、自分が開設した口座の通帳に、見ず知らずの被害者からお金が振り込まれる。そのお金は、交通事故の示談金という名目で騙し取られたものである。こうして、それぞれの行為が互いに連結していきながら、生成し、再生産されるシステムが生み出されていく。

さきほど、システムはプロセスであると述べたことともつながるだろう。ある局面で、特定の利害が発生し、それに付随する活動が生まれる。局面はいずれ変化するので、利害も変化したり、複雑になったりする。それにあわせて、活動も変化し、複雑になる。こうして、システムにかかわっている個人の意図をはるかに超えた自律性のようなものがシステムの側に発生するのである。

「集団や組織を力強く結束させるためには目標の一致が不可欠である」との見解を常識のように思っている人が多い。しかしながら、人々がつながるためには、それぞれが別々の利害で、別々の目標を追求していても可能なのである。つまり、それぞれの利害関心のなかで、相手が自分に利益を与えると予期できて、それがどのようにすれば達成可能であるかについて、その手段が共有できるとき、互いに補足し合うように行為は連結するのである。

こうした相互につながりあった行為が繰り返されるなかで、システムの構造は形成されてくる。もちろん、集団や組織のなかで、空間や時間を共有するなかで友情やパートナーシップが共有されることはある。しかしながら、それはシステムを成立させるための必要条件ではなく、そうしたものが生ずるのはずっと後になってからのことである。

### (4) 他と区別される境界をもつシステム

それぞれの利害関心を一致させて、手段を共有する集団は、自分たちと他のものたちを差異化させるための線引きを行う。すぐに思いつくのは、企業間の競争である。A社が、業界のシェア

で遅れをとっている B 社に対抗して、あらたな商品開発を手がけて成功をおさめ、B 社を追い抜く。やがて、B 社は負けじと A 社に対抗するための新たな商品開発を手がける。こうした例は、「区別される境界」をもつシステムをイメージするのにわかりやすいと思う。

だが、ここでは、もっとシステム思考の対象範囲をひろげてみたい。さきほど、援助交際やブルセラ問題という女子高生の性風俗を取り上げた。宮台は、多くのインタビュー取材のなかで、同じ女子高生でも、「エッチ系バイト」の考え方に関して、通う高校のレベルや所属するネットワークによる違いを見いだしている<sup>11)</sup>。

じつは同じ女子高生といっても、都立校か私立校か、高偏差値か中偏差値以下かといったちがいで、人脈ネットワークがちがう。私立女子高生の付き合う「タメ」の彼氏はほぼ同じ偏差値レベルの私立校の男子だし、エッチ系バイトは圧倒的に私立校ネットワークである。また私立女子校に通う高偏差値の子といっても、伝統名門校なのか、リニューアルして商業科を廃止した新興名門校の進学科なのかで、プライドというかタカビー（高飛車からきた言葉）ぶりもぜんぜんちがいで、エッチ系バイト・ネットワークが根を張るのは圧倒的に後者となる。また、ひとつの高校内でも、普通科と進学科とではエッチ系バイト・ネットワークの中心人物がちがうのが普通だ。

メディアに描かれる「いまどきの女子高生の性風俗」の記事などから、私たちはついステレオ・タイプに固定的なイメージをつくりがちだ。しかしながら、当事者にとってみれば、宮台の記述にみるように、同じ性風俗に対する考え方にはそれぞれのグループで雲泥の差がある。つまり、これも、彼女たちにとって、とても大切な「他と区別される境界」なのである。

#### (5) だれが何をシステムとして設定するか

すでに述べたように、システムとは、認識上の産物でもあった。このことは、現実として存在するシステムを外部から見る視点と、システムの参与者（もしくは内部にいるもの）の視点は違うということでもある。また、外部者にとってみても、内部者にとってみても、その認識する側が何を境界として設定するか、あるいは何を構成要素として抽出するかによっても、システムの有り様は異なったものになる、ということである。

このようなシステム設定の任意性に関連して、黒石晋は『システム社会学』のなかで、スケールという言葉を用いて次のように述べる<sup>12)</sup>。

システムというのはマクロ集合体を対象とする構成的思考の産物であるから、その集合体の大きさ（スケール）をどこで区切るかによって、同じ対象でもいくつものシステムを措定しうる。つまりシステムというのはスケールによって〈相対的〉であり、何種類もありうることになる。

実は、同じ趣旨のことを、大庭健も『他者とは誰のことが 自己組織システムの倫理学』のなかで述べている。まず、大庭は、システムについて、「周囲からは区別される『秩序だった』まとまりが存在するとき、その秩序だったまとまり (=システム) においては、〈特定のパターン〉が再生産されており、そのシステムは特定の〈構造を持つ〉」<sup>13)</sup> と定義する。つまり、「システムの〈構造〉とは、システム境界内での要素間関係の限定のされかたのパターンのこと」というのである。続けて彼は、「『システム』と『構造』を、このように捉えたとすれば、同じシステムも、様々な異なる構造を持ちうる。従って、同一のシステムにおいて『構造変動』がありうる」<sup>14)</sup> と述べている。

少し抽象的になりすぎたかもしれない。たとえば、こういうことだ。ひとつの学級というまとまりを対象として捉えたとき、どのメンバーたちのどんな集団を境界として切り取ってみつめるかによって、いろんな集団の姿が見えてくることがある。全体として「楽しそうな」学級が、ごく少数の者たちの視点からすれば、ちっともそうでないことはよくあるだろう。つまり、システムというのは、スケールによって相対的なものであるということである。

## 4. システムのなかで生きるということ

### (1) システムの一面としての制度・組織

ところで、角川書店の『国語辞典』で「システム」を引いてみると、広辞苑と違い「組織制度 体系」と単語で短く説明されている。これまで、システムについていろいろと検討してきたが、「組織」や「制度」という概念と、これまで説明してきた「システム」という概念とを同一に考えていいのか、そうではないのか、疑問のある人もいると思う。

組織や制度の訳語としては、それぞれ organization や institution が思い浮かぶだろう。だが、たしかに system という言葉もよく使われる。しかし、結論から言えば、「組織」や「制度」という概念には、これまで述べてきたプロセスとしてのシステムというニュアンスが出てこないと思う。また、とても重要な、システム (スケール) 設定の任意性というものが捨象されている。つまり、制度も組織も、ある程度、客観性のある実体として、共有できているような存在であると思う。

まずは制度からみていこう。制度というのは、法律や規則を制定することによって、秩序立って合理的に運営される国家・社会・組織のしくみのことである。それは、意識するしないに関わらず構成員の規範的な行動様式として確立されている。そういう意味で、「制度とはシステムである」という言説は、たしかに成り立つ。秩序立って合理的に運営されているということは、客観的に捉えられる明確なものに根拠づけられているということでもある。実際、外国人に日本の社会保障制度や学校教育制度を説明するために、日本の法律や規則に依拠した説明が可能であろう。

しかし、同じ外国人に、いま日本の子どもたちに起きているいじめ・不登校・学級崩壊などの

教育荒廃をどうやって説明できるだろう。教育制度という観点からのみで、そういう子どもたちの状況をわかりやすく説明することが可能だろうか。やはり、説明するには他の手だてが必要であると考えのではないだろうか。つまり、「システムとは制度のことである」とは言えないのである。

それでは組織はどうだろうか。組織というのは、特定の目的を達成するために部分と部分を互いに関連づけてつくられる一つのまとまった仕組みのことである。企業のように、利益の向上に向けて組織の構成員の役割や相互関係がきちんと定められている集合体をイメージしてもらえばよい。そういう意味で、「組織とはシステムである」という言説は成り立つ。

学校も、組織としての経営目標や教育目標をもっている。その目標を実現するための教育計画のなかで、学校管理職・教師・子ども、それぞれの役割分担も形式上はしっかりとできていると思う。しかしながら、学校の場合、会社組織とちがって、売り上げや営業利益などという数値に一元的に還元できる目標をもっているわけではない。教育の過程とその成果の関係も、あいまいさに満ちている。

こうした学校空間のなかで、子どもたちは教師の意図とは離れたところで、自らに必要な情報を取捨選択しながら、自分たちの世界を形成しているのではないか。そういう意味では、学校というシステムのなかで、異なった次元で子どもたちはそれぞれに自分たちのシステムをつくっているのではないだろうか。つまり、「システムとは組織のことである」とは言えないのである。

## (2) 日常のなかにあるシステム

それではあらためてシステムについて考えてみよう。組織とか制度というものはたしかにシステムに変わりはないが、システムのごく一部、ごく一面にすぎない。では、どう考えたらよいのか。システムというのは、そういう経験的な実体というよりも、さきほど述べてきたように集団・組織・制度・時間・文化に対し、ある境界を設定して、認識をする者にとっての思考のパターン(ものの見方・考え方)とか、認識枠組みのようなものだと思ってもらえばよい。

この考え方の利点は、たとえば学校などの組織を研究対象とする場合に、同じ学校という対象でも、研究者の認識枠組みによっていくつものシステムを指定できることである。たとえば、学級における特定の小集団に起きている問題に思いを巡らすこともできるし、学校を地方教育行政システムにおけるサブ・システムとして位置づけることも可能である。また、学校の教育活動含めてそれを構成する子どもや教師が共有している文化(思考・行動様式)をひとつのシステムと見なして、現代社会における消費文化(学校の外側にある文化)と関連づけて考察を深めていくこともできる。

話がかなり抽象的になってきているので、私たちが日常的に用いている会話や文章表現のなかにあるシステム思考についてふれてみよう。

わたしたちは、日常的な思考のなかでも、言葉によって、何らかの集合体の境界を設定し、それによって、その集合体のもっているであろう性質を任意に指定している。私たちはこのような



表現もよく使う。「うちのグループは・・・」「うちの会社は・・・」「うちの部署は・・・」「うちの地域は・・・」「うちの家族は・・・」と、自分という存在を中心に、ある特定の範囲の境界設定を日常的に行っているのではないだろうか。そのとき、境界化によって生じているまとまりこそが、まさにシステムであるといってよいだろう。わたしたちは、知らず知らずのうちに、内部と外部を区別することによって、そのシステムの固有性（状態・性質）を措定しているのである。

これらのことから、システムというのは、特別な存在ではなく、いつも私たちの日常的な思考のなかにあることがわかる。ただ、日常的なものであるがゆえに、そのときの状況で都合よく使っていたりして、場面が変われば、意識の対象からはずれてしまうことが多いような気がする。だから、改めて、そういう意味でのシステムについて考察を深めようとしてこなかったのではないだろうか。

### (3) なぜ、いまシステム論か

こうしたことを考えていくと、システム論の射程範囲が広がってくる。それは、学級において、家庭・地域社会において、さらには教育言説の世界で、子ども・教師たちがさまざまな関係性のなかでゆれ動きながら、ときに何かに頼り、ときに何かを拒絶しながら、意味の境界設定を絶えず行っている姿である。私たちは、システム論を学ぶことによって、我々自身が<見えざる何か>とつねに対峙している様子をもっとリアルに描き出すことができると思う。

そのためには、そうした私たちの日常のなかにあるシステムにこだわり、そのシステムのなかの構造を際立たせて、構造を成り立たせている各要素や要素間の関係を明らかに、何が問題となっているのかを自覚的に生きていくことが必要だと思う。

だからこそ、問われるのは、その研究者や認識する側が何をシステムとして措定するか、ということになる。さらには、つまり教育に対してどんな世界を信じようとしているかも重要になってくるだろう。子ども（大人も含めて）は、先にみたように、複数のシステムの内部において構成され期待される役割関係を同時に生きている。子どもは、家庭・学校・地域社会・消費文化・・・と、相互がつながったり、入れ子になったりしながら複雑に絡まり合うシステムの構成要素の一部であるということだ。子どもを理解するということは、学校というシステム内部の構成要素として「子ども」を閉じこめずに、多面的な視座から子どもが関わっているシステムを考察していくことが必要なのではないかと思う。

### 参考文献

- 1) R.D.レインは、「自己と他者」において、現実的な自我のあり方として、人が他者の視線によって初めて自分の形を得ること、すなわち、相互的、補完的な存在としてのアイデンティティの存在を指摘した。(R.D.レイン著、志賀春彦、笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房、1975年)
- 2) 2009年2月9日放送分。雇用情勢が悪化するなかで、これまで犯罪とは無縁だった人々が振り込め詐欺組織の下支えをする構造が生まれている。若者たちが詐欺に手を染めていく軌跡を丹念に取材することによって、現代日本社会の抱えるいびつな病理を浮き彫りにしている。



- 3) 言い分けは、「言い訳」とも表記できるが、「言葉を使い分ける」という時に用いられる「言い分(ぶん)」のほうがより適切に意味を表現している。
- 4) 宮台真司『制服少女たちの選択』講談社、1994年、82頁。
- 5) 1993年11月～12月に実施されたもの。売る品物の種類によってなだらかなグラデーションを描くことがわかった。ここから、「程度問題」という発想が生まれる。
- 6) 宮台、前掲書、82頁。
- 7) 宮台、前掲書、82頁。
- 8) 宮台、前掲書、84頁。
- 9) プロセス(過程)としてのシステムという捉え方は、ワイクによるところが大きい。彼は組織とは、不断に再構築を繰り返す進行中でダイナミックな秩序であることを強調した。(カール・E・ワイク著、遠田雄志訳『組織化の社会倫理学』(第2版)』文真堂、1997年)
- 10) ワイクは、オルポートの集合構造論である「人々は最初手段について収斂するのであって目的についてではない」ことを手がかりに、自らの理論を展開している(ワイク、前掲書116～124頁を参照)。
- 11) 宮台、前掲書、28～29頁。
- 12) 黒石晋『システム社会学——大キサの知——』ハーベスト社、1991年、13頁。
- 13) 大庭健『他者とは誰のことか 自己組織システムの倫理学』剋草書房、1989年、167頁。
- 14) 大庭、前掲書、168頁。

(こがの たく：幼児教育科 教授)